



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
<http://www.kokubunken.or.jp/>
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

「一系の天子富士の山」

―皇室を巡る議論の中でおもふ―

理事長 小柳志乃夫

東京に住んでみると、冬晴れの朝は、西の空遠く、真白な富士山の姿を仰ぐ幸に恵まれる。

元日や一系の天子富士の山

は、明治時代の俳人、内藤鳴雪の有名な一句だが、この句もまた元日の空に富士山を望んで生れた句であらう。この句を読むと、晴れやかでまた誇らかな心がわき、背筋が伸びるやうな思ひがする。

「元日や」―新たな年が明けて万物が改まる日、空は澄みわたつて、初日の光が照り輝いてゐる。その光は、太陽の神、天照大御神のみ光であつて、その神はいふまでもなく皇室のご祖先神である。日本書紀の神話では、高天原から皇孫瓊瓊杵尊が地上に降臨される時に、天照大御神は「宝祚の隆えまさんこと、まさに天壤と窮無かるべし」(皇位の栄えることは、まさに、天地と同じく永久に続き窮まることがないであらう)と仰つ

た(「天壤無窮の神勅」)。それ以来その神勅の通り、天皇は万世一系(父系)で現在に至つてゐる。これが「一系の天子」である。

一方、「富士の山」は、神勅の「天壤(天地)」にあたる存在だ。万葉の歌人、山部赤人は「天地の分かれし時ゆ神さびて高く貴き駿河なる不尽の高嶺を」と神話を回顧して富士の神山を望んだ長歌を残した。

神話的にいへば、天地開闢以来、我が国には「一系の天子」と「富士の山」がある。いづれも至高にして永久の存在であり、それを現に仰ぐ感動を万葉の歌人も明治の俳人も共にうたつたのである。さらに、鳴雪の一句には明治の空気が漂つてゐるやうだ。「元日や」には昇る朝日とともに、明治時代の正月元日の街並みを飾つたであらう日章旗の姿も投影されてゐるのではないか。また、「元

日」「一系」「天子」といふ一連の漢語のリズムを一句の中に活かしたところにも、明治の時代の息吹を偲ばせるものがある。

この一句には、悠久の歴史を貫く、気高い日本の国の姿とともに、明治の国民精神が浮び上がつてくる。一句十七文字の中に、日本の国の伝統が生きてゐるのである。現在、この誇るべき「一系の天子」の永久性の確保が皇位の安定的継承として課題になつてゐる。

また、昨年の真子様のご結婚に際しては、各種報道から様々な問題が投げかけられた。この点で、評論家の江崎道朗氏は明治時代に作られた皇室を支へる仕組み(皇室の藩屏、宮内省、皇室財産、天皇による皇族の監督など)を紹介され、それらが占領中にことごとく解体されて戦後そのままに放置されてきた問題を指摘されてゐる(月刊「正論」令和四年一月号「皇室支える仕組みの再建を」)。安定的皇位継承のために、有識者会議案に示された旧宮家の皇籍復帰の実現を急ぐとともに、皇室を支へる仕組み作りを進めるべき時期である。今はいはば富士山に少し雲がかかった様子だが、その雲の向うに美しい富士が聳え立つてゐるやうに、天皇が蔽としていらつしやることを忘れまい。

皇室存続の最大の危機であつた大東亜戦争の終戦時のエピソードがある。ポツダム宣言の受諾をめづつて国体護持ができるか否かの大議論があり、昭和天皇のご聖断が下される。その八月十四日の夜遅く、御前会議で対立した阿南陸相が鈴木首相に今生の暇乞ひの思ひを胸に秘めつつ、挨拶に訪れる。その時、首相は「阿南さん、皇室は必ずご安泰ですよ。なんとすれば、今上陛下は、春と秋のご先祖のお祭りを必ずご自身で熱心におつとめになつてゐられますから」と言ひ、陸相も「私もさう信じます」と応へたといふ(追水久常著「機関銃下の首相官邸」)。

令和の今上陛下も祭祀を熱心にお勤めになつてゐる。お祭りを通して、かつての国民を慈しみたまうたご祖先にお心を通はせてゐられることと拝される。ここにご祖先の神々のご加護があると、終戦時の大臣たちは信じたのであらう。

天皇と国民の関係は現在の断面だけではとらへきれない。国民もまたかつての天皇を仰いだ懐かしい先人の心を追慕したいものである。鳴雪の一句に込められた思ひもその一つである。「一系の天子」の永遠は「一系の天子を戴く日本国民」の永遠と表裏する。